

研究所たより 研究所たより

協同集会 in 千葉の準備で、この1ヶ月間、研究所の外に出ているいろいろな人に会うのが日課となっている。名刺が1ケース以上なくなり、代わりに100人近い人たちのアドレスが手元に残った。日々新しい人に出会うというのは、緊張感と同時に新しいものの見方や知識を得るまたとない機会、刺激を受けている。

特に協同集会というのは、私たちが狭い協同組合の中で悩み実践している事柄が、外の世界の人たちとどう共有できるのか、を問い直す機会であり、地域の中で自分たちが何をしているのか、また何をすべきであるのかイヤでも考えざるを得ない。そんな中で自分と同じような考え方をもち、集會に賛同して積極的に参加してくれる人に出会えたときの喜びはひとしおである。もちろん全ての部分に共感し合っているのはわからないが、少なくともお互いのある部分を認め交流していくことで、新しい何かが生み出せるような気がする。

今回の集會では、集會開催目的のひとつに、「行政と市民の協同（協働）のあり方を考える」というテーマを掲げた。NPO法が施行され3年以上が経ち、NPO法人として認証される市民団体の数は確実に増加している。その市民パワーを行政の中に取り入れていこうという動きも全国的に広がっている。やはり法制度が出来ることで、市民も行政も意識が変わってきている。その一方で、「行政と市民のパートナーシップ」はまだまだ掛け声だけに終わっている部分も大

きい。

千葉県は堂本知事が誕生して以降、「NPO立県」を政策に掲げ市民の力を積極的に活用する姿勢を打ち出してきた。その「NPO」の射程を単に法人としてのNPOに留めるのではなく、協同労働の分野にも広げ位置付けて欲しいというのが集會のひとつのねらいである。その意味では知事に挨拶をお願いし、紆余曲折ありながらも実現したことは、大きな成果であるといえる。記念講演をお願いした堀内光子 ILO 駐日代表にもお力添えをいただいたが、最後は知事本人の希望で超多忙なスケジュールに都合をつけてくれたことは、非常に意味のあることだと思う。また、知事の肝いりで今年設置された県のNPO室も室長の参加を即決してくれた。この他にも県内では最もNPO政策が進んでいるとされる我孫子市の市民活動支援課長や、独自の視点で事業を展開する市川市の情報システム課長など、多忙にもかかわらず集會の趣旨を理解してご報告を快諾していただいた。まだまだ全ての自治体が、というわけにはいかないのだろうが、確実に行政の流れが変わり始めたようにも感じている。

市民運動・事業にも新しい流れが生まれつつあるのを感じる。12分科会のうちの主に4分科会の準備に直接関わっているが、それぞれにエネルギーを持った魅力的な方々に報告者を引き受けていただいた。「食と農から地域を考えよう」(第6分科会)では、東京・小金井で若い女性たちだけでイタリア

のスローフード協会の支部として活動し、ケータリングサービスを行うお店「Yadocarism」のヤシマミカさんをお願いをした。店舗も自分たちで内装を行い、店の脇のプランターで幾種類ものハーブを栽培しながら、まさに地に足のついた仕事をされている。もちろん地域の伝統的な食材と伝統的な調理法など様々なこだわりは持ちながら一方で多様性を認めるスローフード運動に共感する若者も多い。また、「くらしの協同化と住民参加のまちづくり」(第7分科会)では、日本発のコレクティブハウス「かんかん森」の設立とコーディネートを行っている「NPOコレクティブハウジング社」の宮前眞理子さんにお話を伺う。これまでの「持ち家」に偏った住宅政策へのオルタナティブとして、共有スペースを豊かに確保し、食事作りなどを共同で行うことで、「既成の家族概念、福祉概念、住宅概念にとらわれず、人と人との新しいかかわり方をつくりながら、より自由に、楽しく、安心安全に住み続ける暮らし方」としての賃貸住宅「コレクティブハウス」をいよいよ来年オープンしようとしている。高齢者のグループリビングなどとは違い、様々な年代の様々な人たちが一緒に住み協力し合う仕組みを、住宅をベースとして実現する仕組みは北欧や米国では広く一般化しているというが、これから日本でも広がっていくことだろう。

福祉の専門家と話をしても、農業に関わる方と話をしてもやはりこれからは「協同」

の時代だと言う。経済が破綻に近づきつつある今こそ、人間と人間が支えあう仕組みとしての「協同」が本能的に求められているのかも知れない。

(菊地 謙)